

## 4 国際交流

### [概要]

本館では、研究活動の国際性を拡充するべく、国際研究集会の開催や外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣等を行っている。2021年度の具体的な取り組みは以下のとおりである。

#### 1. 国際戦略の制定

本館は博物館機能を有する大学共同利用機関としてのミッションを達成し、現代的視点と世界史的視野のもとに、日本の歴史と文化に関する研究を推進する国際拠点としての役割を果たすため、以下の国際戦略を制定している。この国際戦略に対応するかたちで、海外研究機関との学術交流協定等の締結、国際交流事業等の充実、外国人研究員等の受入、国際シンポジウムの開催等に取り組んだ。

(組織的な連携)

- ・海外の機関との組織的な連携を強化する。当面は、東アジア、ヨーロッパ及び北米を重点地域とする。
- ・日本歴史研究の国際的なネットワークを構築する。

(共同研究、成果発信)

- ・国際的な共同研究を推進し、成果の国際発信を強化する。
- ・展示、フォーラム、博物館資料の活用等を通じて国際共同研究の可視化、高度化を図る。

(若手研究者育成)

- ・協定機関との派遣・招へい等を通じて若手研究者の育成を図る。

#### 2. 学術交流協定等の締結

チューリッヒ大学美術史研究所東アジア美術学科(スイス)と新規に学術交流協定を締結した。

#### 3. 学術交流協定等に基づく国際交流事業等の充実

国立台湾歴史博物館(台湾)との「日本と台湾からみた地域歴史像の解明」等7件の国際交流事業を推進した。前年度より引き続き、ジュネーヴ市立アリアナ美術館(スイス)において、チューリッヒ大学とも連携し、国際連携展示「菊・龍・サムライ—アリアナ美術館所蔵の日本陶磁」(2020年12月11日～2022年1月9日※新型コロナウイルスの影響で2020年12月24日から臨時休館。2021年3月1日再開)を開催した。また、グラム大学東洋美術館(イギリス)において、国際連携展示「Monogatari: the art of storytelling in Japanese woodblock prints」(2022年1月28日～2022年5月15日)を、ジュネーヴ市立版画キャビネットおよびチューリッヒ大学との連携により、ジュネーヴ美術歴史博物館(スイス)において、国際連携展示「明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から」(2020年2月13日～2020年8月11日 ※新型コロナウイルスの影響で2020年3月11日から臨時休館。2020年7月2日再開)を開催するとともに、ジュネーヴ市立アリアナ美術館においては国際連携展示「SURIMONO」(2022年3月18日～2022年8月21日)をこれまでの研究の成果をもとに開催した。

#### 4. 外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣

本館の受入制度に基づき、外国人研究員を1名受け入れた。

#### 5. 国際シンポジウム等の開催

国際交流事業に基づくものとして、国際シンポジウム「近代東アジアのスポーツ世界と身体」(2021年5月13日・14日 主催:国立成功大学人文社会科学センター、国立台湾歴史博物館、国立歴史民俗博物館)を国立成功大学およびオンラインにおいて開催した。

また、国際シンポジウム「戦争のランドスケープと先史社会」(2021年11月20日 主催:国立歴史民俗博物館 共催:岡山大学文明動態学研究所、科研費(新学術領域研究)「出ユーラシアの統合的人類史—文明創出メカニズムの解明—」)を歴博講堂およびオンラインにてハイブリッド開催するとともに、国際研究集会「中世文書の様式と東アジアにおける国際比較」(2021年11月20日 主催:国立歴史民俗博物館)、および「国境を越える『延喜式』」(2021年12月18日・19日 主催:国立歴史民俗博物館 共催:人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「総合書物学」)国

立歴史民俗博物館ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」, 科研費(基盤研究B)「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」, さらにネットワーク型基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」の一環として, 国際シンポジウム「スイスに伝えられた日本陶磁—ジュネーヴ市立アリアナ美術館秘蔵コレクション」(2022年1月6日 主催: 国立歴史民俗博物館, チューリッヒ大学東洋美術史研究室), 「新しいシーボルト研究への誘い—シーボルト(父)関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと—」(2022年1月15日), 「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション—さらなる洞察」(2022年3月14日 主催: 国立歴史民俗博物館, ウィーン世界博物館)をオンラインにて開催し, 本館の国際化と研究分野・研究手法の多角化を研究者コミュニティの内外に示すことができた。

国際交流担当 松田 睦彦

## [国際交流事業一覧]

	相手機関名	事業名	事業主体者
継 続	韓国 ソウル大学校	放射性炭素14年代の偏重分布—考古・物理・統計学的学際研究—	研究部 藤尾慎一郎
	台湾 国立台湾歴史博物館	日本と台湾からみた地域歴史像の解明	研究部 樋浦 郷子
	韓国 国立中央博物館	先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究II	研究部 高田 貫太
	英国 グラスゴー博物館機構	スコットランドにおける日本歴史展示構築のための調査研究	研究部 日高 薫
	韓国 国立慶北大学校人文学 術院	東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究	研究部 三上 喜孝
	韓国 国立釜山大学校博物館	国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力	研究部 藤尾慎一郎
新 規	韓国 国立文化財研究所	国立文化財研究所との研究者交流事業	国際企画室長 大久保純一

### (1) 放射性炭素14年代の偏重分布—考古・物理・統計学的学際研究— 2018～2021年度

(事業主体者 藤尾 慎一郎)

#### 1. 目的

日韓の先史時代における炭素14年代を用いた共同研究を行い, その成果をデータベース(以下DB, ソウル大学校にて作成予定), 国際シンポジウム, 国際展示として可視化・高度化する。

#### 2. 今年度の研究計画

日本学術振興会の二国間交流事業が不採択となったことで, 新たな枠組み作りについて, ソウル大学校に赴き, 金壯錫教授(昨年9月よりソウル大学校博物館長に就任)と議論する。DB(日韓先史時代炭素14年代測定値DB)の公開方法をめぐる議論が中心である。

#### 3. 今年度の研究経過

昨年度に引きつづき, 新型コロナウイルスにより, 海外に渡航できなかつたため, 当該年度の計画は未達成である。

#### 4. 今年度の研究成果

計画が未達成のため, 成果はない。結果的に, 先方担当者の異動やコロナ禍のため3年連続で渡航できなかつたことで, 計画を軌道修正することができず, 期限を迎えてしまったことは残念である。また取り巻く環境が落ち着いた段階で, 新しい世代によるソウル大学校との交流に期待するものである。

#### 5. 事業組織 (◎は事業主体者, ○は副主体者)

李 昌 熙 釜山大学校・教授

- ◎金 壯 錫 ソウル大学校・教授  
 高田 貫太 本館研究部・教授 箱崎 真隆 本館研究部・特任助教  
 ○坂本 稔 本館研究部・教授 ◎藤尾慎一郎 本館研究部・教授

## (2) 日本と台湾からみた地域歴史像の解明 2018～2022年度 (事業主体者 樋浦 郷子)

### 1. 目的

本館と国立台湾歴史博物館は、これまで災害史およびスポーツ史を中心として、「資料に依拠する」という基本的な研究方法にそって、共同研究を行ってきた。今期は第二期にあたる。引き続き災害史を継続課題とするとともに、資料研究の「歴博所蔵『高山族民俗資料』」、文献資料研究とフィールド研究をあわせもつ「近代の教育と植民地時代」、フィールド研究を通じた「日本と台湾の漁撈文化」、「民俗研究映像の制作・保存・共有」の4つのテーマについて共同研究を推進する。

また、これまで共同研究を展開する上で、組織と研究者同士のネットワークが確立できたのだが、さらに双方の研究者の交流を組織的に発展させることも目的とする。

### 2. 今年度の研究計画

本館教員の2名を3回派遣することを企画したものの、コロナ感染症拡大により互いの往来が不可能になったため、柔軟にオンライン交流を実施することとした。

### 3. 今年度の研究経過

国立成功大学、国立台湾歴史博物館と共同主催し、国際シンポジウム「近代東アジアのスポーツ世界と身体」(2021年5月13日～14日 国立成功大学およびオンライン)開催による研究成果の発信を行った。また、国立台湾歴史博物館において、「東亞體育世界的臺日運動交流國際展」(2021年8月12日～2021年11月7日)を開催した。

### 4. 今年度の研究成果

2021年度にも引き続き新型コロナウイルス感染症の拡大により、台湾を訪問することが困難になった。非常に困難な状況のなか、オンラインによる国際シンポジウムを台湾から行うという挑戦的な試みを成功裡に終えることができた。また、国立台湾歴史博物館で昨年来延期になっていた「東亞體育世界的臺日運動交流國際展」(2021年8月12日～2021年11月7日)も、オンラインによる相互の資料確認を実施して円滑に開幕、終了に至った。

### 5. 事業組織 (◎は事業主体者、○は副主体者)

- 石 文 誠 国立台湾歴史博物館・研究組研究員  
 ◎陳 怡 宏 国立台湾歴史博物館・研究組長  
 林 能成 関西大学・教授  
 内田 順子 本館研究部・教授 松田 陸彦 本館研究部・准教授  
 西谷 大 本館・館長 川村 清志 本館研究部・准教授  
 久留島 浩 本館研究部・特任教授 ○小瀬戸恵美 本館研究部・准教授  
 ◎樋浦 郷子 本館研究部・准教授

## (3) 先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究II 2019～2021年度 (事業主体者 高田 貫太)

### 1. 目的

学術交流協定締結機関である韓国国立中央博物館(以下、中央博)とは、2009年度～2012年度に第2期、2015年度～2018年度に第3期の共同研究を行い、総合展示第1室リニューアル事業に対する中央博側の協力を得ることができた。

ただ、共同研究の成果公開の中の論文集刊行は、未達成であり、かつもう少し共同研究を継続する必要がある

ことから、引き続き「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究」をおこなうことにした。また、展示協力についても一層推進していく。それにともない、中央博が2019年12月に開催する企画展示『加耶』の内容に基づいて、本館でも2020年7～9月に『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—（仮）』の開催が決定した。しかしながら、コロナ禍の影響のため、開催が延期となっている。その実現に向けて交流事業を推進していく。

## 2. 今年度の研究計画

展示協力と、共同研究会とそれに関する現地調査を1、2回程度行う。

特に、開催が延期となっている国際企画展示『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—（仮）』の開催実現のために、展示協力を行う。展示開催が実現した後に、その展示期間中に本館において共同研究会を催したい。

## 3. 今年度の研究経過

### 【展示協力】

・継続して協議を行ったが、今年度の国際企画展示開催は断念せざるを得なかった。しかしながら、2021年10月に、延期していた展示の2022年度冬（2022年10月4日～12月11日）の開催について合意することができた。

### 【共同研究】

・コロナ禍のために、予定した共同研究を実現することはできなかった。ただ、中央博・考古歴史部学芸研究士のキム・デファン氏が、2020年12月16日～2021年6月15日まで、外国人研究員として来日され、その中で『加耶』展の図録内容の検討や、加耶と倭の交流を示す近隣の遺跡を踏査するなどの研究を行っている。

## 4. 今年度の研究成果

今年度は、延期となっていた国際企画展示『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—（仮）』について、中央博と協議を重ねて、開催を決定することができた。また展示図録の内容についても、中央博と協議をし、その質を高めることができた。ただし、共同研究についてはコロナ禍のため実現できなかった。

## 5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

キム ミギョン 国立中央博物館・学芸研究士	キム デファン 国立中央博物館・学芸研究士
○ヤン ソンヒョク 国立中央博物館・学芸研究官	◎キム サンテ 国立中央博物館・考古歴史部長
藤尾慎一郎 本館研究部・教授	上野 祥史 本館研究部・准教授
三上 喜孝 本館研究部・教授	○松木 武彦 本館研究部・教授
◎高田 貫太 本館研究部・教授	

## （4）スコットランドにおける日本歴史展示構築のための調査研究 2020～2022年度 （事業主体者 日高 薫）

### 1. 目的

グラスゴー博物館機構は、ケルヴィングローヴ美術博物館を中心に、グラスゴー周辺にある12の博物館や中央収蔵庫施設からなる組織である。日本政府が1878年に寄贈した1,150点の資料と、1901年の万国博覧会を機にそれ以降継続的に収集された日本資料約2,500点を所蔵する。

本事業においては、これらの日本資料（とくに1878年の日本側との交換寄贈資料）の概要調査をおこない、必要な情報を提供することにより、同館によって出版が計画されている館蔵日本コレクション目録の作成に向けて協力する。また、調査による資料情報の付与は、グラスゴー市郊外にある中央収蔵庫における収蔵展示に反映されるため、これにより現地での展示を通じた日本資料の活用を充実させることを目的とする。

### 2. 今年度の研究計画

- ①三木美裕氏を含め本館から2名の研究者を派遣し、グラスゴーをはじめとするスコットランドにおける日本美術関連資料の調査をすすめる。
- ②①の調査成果を、順次グラスゴー博物館機構における目録に反映させる。
- ③グラスゴー博物館機構収蔵展示における日本文化理解と、日本研究活性化のための教育事業に協力する。
- ④ダラム大学東洋美術館において進行中の展示・教育事業に①の調査成果を反映させる。

### 3. 今年度の研究経過

- ①1860～80年代、グラスゴーに日本コレクションが形成された経緯について、当時の学芸部長ペイトンに関する資料を中心に記録・蔵書・新聞記事などの文献資料調査をすすめた。(2019年度から継続)
- ②ケルヴィングローヴ博物館における常設展示への日本関係資料の展示、また同館における日本関係の特別展開催に関する打合せをリモート会議でおこなった。
- ③ダラム大学東洋博物館との連携により準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催を延期していた企画展示「Monogatari: the art of storytelling in Japanese woodblock prints」を開催した。(2022年1月28日～5月15日)
- ④スコットランド美術史学会と共催で、「スコットランドと日本美術」をテーマとした研究大会を開催し、本館側から三木・日高・大久保の3名がオンラインで参加した。(2022年2月10～11日、於スコットランド国立博物館)

### 4. 今年度の研究成果

新型コロナウイルス感染拡大の影響で滞っていた活動を何とか再開し、ダラム大学との協定を延長するとともに東洋美術館における企画展示を開催することができた。残念ながら日本からの研究者の派遣はできなかったが、スコットランド美術史学会との共催によってハイブリッドで開催した研究大会では、多くの意義深い報告がおこなわれ、スコットランドにおける日本研究への関心の高まりを感じさせた。

### 5. 事業組織 (◎は事業主体者, ○は副主体者)

◎マーティン・ベラミー グラスゴー博物館機構・研究部長

ユピン・チャン グラスゴー博物館・学芸員

澤田 和人 本館研究部・准教授

福岡万里子 本館研究部・准教授

三木 美裕 本館・共同研究員

○大久保純一 本館研究部・教授

◎日高 薫 本館研究部・教授

## (5) 東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究

2020～2022年度

(事業主体者 三上 喜孝)

### 1. 目的

本事業は本館と慶北大学校人文学術院との学術交流協定にもとづき、研究者の交流を図るものである。

慶北大学校人文学術院は、HK+事業「東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究」として韓中日の木簡研究を推進している。本館との学術交流協定を通じて日本・韓国の古代木簡の共同研究を進め、東アジアにおける木簡文化、さらには漢字・儒教・律令など中国文化伝播の実態解明をめざす。

一方、本館でも、古代東アジアの文字文化に関する共同研究や、企画展示(「古代日本 文字のある風景」2001年、「文字がつなぐ 古代の日本列島と朝鮮半島」2014年)などをこれまで行ってきた。本館としては、慶北大学校人文学術院と積極的に学術交流を進めると同時に、この協定を足がかりに韓国や中国の他機関とも交流を進め、東アジア文字文化に関する研究拠点となることをめざす。

### 2. 今年度の研究計画

共同研究会とそれに関する現地調査を1,2回程度行う。

### 3. 今年度の研究経過

以下の研究会をオンラインで行った。

1. 慶北大学校 人文学術院 HK+事業団 第3回 国際学術大会「慶山所月里木簡の総合的検討」

日 時：2021年4月26日～27日

場 所：慶北大学校 人文韓国振興館 B102

主 催：慶北大学校 人文学術院

主 管：韓国木簡学界, (財)花郎文化財研究院, 慶北大学校 人文学術院 HK+事業団

後 援：韓国研究財團

発表者：三上喜孝「古代日本における人面墨書土器と祭祀」(オンライン参加)

## 2. 日韓合同学術大会「古代韓国と日本の文字文化と書写材料」

日 時：2022年2月23日

場 所：オンライン

主 催：国立歴史民俗博物館・慶北大学校人文学術院HK+事業団

プログラム

挨拶 尹在碩（慶北大学人文学術院長）、西谷大（国立歴史民俗博物館長）

趣旨説明 三上喜孝（国立歴史民俗博物館）

研究発表1 「慶山・所月里木簡の性格—新羅村落文書との比較および形態的特徴より」

橋本繁（慶北大学人文学術院）

研究発表2 「正倉院宝物にみる紙木併用」佐々田悠（宮内庁正倉院事務所）

研究発表3 「形式論からみた新羅村落文書—構造・書式と用語」李鎔賢（慶北大学人文学術院）

研究発表4 「銘文刀剣からみた古代日韓関係」金跳咏（慶北大学人文学術院）

研究発表5 「宗教からみた古代日韓の石と文字の文化」堀裕（東北大学大学院文学研究科）

研究発表6 「『開仙寺石灯記』の外的性格に関する2, 3の問題」赤羽目匡由（東京都立大学人文社会学部）

総合討論 討論者：李東柱（慶北大学人文学術院）、畑中彩子（東海大学） 司会：三上喜孝

## 4. 今年度の研究成果

2021年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、韓国での資料調査や研究会ができなかったが、オンラインにて研究会に参加し、活発な意見交換と学術交流を行うことができた。また、上記1の研究会での発表内容は、『東西人文』16（2021年8月、pp.301～306、慶北大学校人文学術院、査読有）に掲載された。

## 5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

◎尹 在 碩 国立慶北大学校人文学術院・院長

李 京 燮 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授

橋本 繁 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授

李 東 柱 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授

金 跳 咏 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授

仁藤 敦史 本館研究部・教授

稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授

○小倉 慈司 本館研究部・准教授（2021.11より教授）

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

## （6）国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力 2020～2022年度

（事業主体者 藤尾 慎一郎）

## 1. 目 的

第3期の事業として実施した国際交流事業「国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力」（2017～2019年度）が終了した。総合展示第1室リニューアルが2019年3月に完成したことで、今後10年間、資料の借用が継続するため、定期的な資料チェックなどを目的とし、展示協力事業は継続する必要がある。さらに釜山大学校博物館から資料借用の要請があった際には、本館側も積極的に検討していく。釜山大学校博物館もリニューアルの話があるため、本館のリニューアルで培った経験と実績をもって協力可能である。

また第3期から始めた研究者交流は、朝鮮半島南部の初期鉄器時代を中心に出土する弥生系土器の調査や、朝鮮半島の新石器時代から三国時代にかけての出土人骨の調査など、新たな研究テーマでの展開を始めつつある。こうした研究を通じて改めて互いの研究内容への理解を深めることで、新しい共同研究テーマを探すことを目的とする。

## 2. 今年度の研究計画

①研究者交流 両機関は互いに研究者1名を10日ほど派遣し、研究交流を促進する。

②展示協力 本館総合展示第1室リニューアル事業において釜山大学校博物館から借用中の所蔵資料のメンテナンス。

### 3. 今年度の研究経過

昨年度と同様に、新型コロナウイルスの影響で海外に渡航できなかったため、予定した事業を行うことはできなかった。

### 4. 今年度の研究成果

新型コロナウイルスの影響で海外に渡航できなかったため、計画は未達成である。あと1年、コロナの収束を願うばかりであるが、2022年11月に先方の館長が任期を終えて交代すると聞いているので、2023年度以降、どうするのか、本館側の新代表を誰にするのかを含めて相談する必要がある。

### 5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

○安 星 姫 釜山大学校博物館・学芸研究室長

◎金 斗 喆 釜山大学校博物館・館長

箱崎 真隆 本館研究部・特任助教

坂本 稔 本館研究部・教授

齋藤 努 本館研究部・教授

○高田 貫太 本館研究部・教授

◎藤尾慎一郎 本館研究部・教授

## (7) 国立文化財研究院との研究者交流事業

2021～2023年度

(事業主体者 大久保 純一)

### 1. 目的

本事業は本館と国立文化財研究院（韓国）との学術交流協定にもとづき、研究者の交流を図るものである。

協定書の別表に「協定書第2条に基づく具体的な交流協力」として「研究者の交流」を掲げ、「毎年両機関は互いに研究者1～4名程度を相手機関へ最大2週間派遣し、相手機関の研究課題から1課題を選定の上、当該研究課題の研究会等に参加させるものとする」と定めていることから、これを国際交流事業として位置づけて実施する。研究者の相互受入に係る調整は、本館国際企画室と国立文化財研究院研究企画課を窓口として行い、双方の機関が組織的な連携を図る。

### 2. 今年度の研究計画

互いに研究者1～4名程度を相手機関へ最大2週間派遣し、相手機関の研究課題から1課題を選定の上、当該研究課題の研究会等に参加させる。

### 3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスの影響で海外への渡航ができない状況にあり、事業を実施することができなかった。

### 4. 今年度の研究成果

新型コロナウイルスの影響により、派遣・受け入れともやむなく実施を見送った。

### 5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

咸 喆 熙 国立文化財研究院・学芸研究士（2021.12まで）

崔 智 燕 国立文化財研究院・研究員

○洪 瑛 珠 国立文化財研究院・係長（2021.12まで）

○林 鍾 恵 国立文化財研究院・係長（2022.1より）

◎金 三 基 国立文化財研究院・課長（2021.12まで）

◎辛 美 貞 国立文化財研究院・課長（2022.1より）

小倉 慈司 本館研究部・准教授（2021.11より教授）

上野 祥史 本館研究部・准教授

○松田 陸彦 本館研究部・准教授

◎大久保純一 本館研究部・教授

## 〔国際シンポジウム〕

### 「近代東アジアのスポーツ世界と身体」

会 場：国立成功大学 成功キャンパス 図書館地下一階会議場およびオンライン

会 期：2021年5月13日・14日

参 加 者：163人（うち外国人31人 ※発表者のみ計上）

主 催：国立成功大学人文社会科学センター（台湾）・国立台湾歴史博物館・国立歴史民俗博物館

#### 1. 開催趣旨

本館は2014年に国立台湾歴史博物館と包括協定を締結して以降国際交流事業を継続し、本事業は二期目である。二期目は二館に加え台南市の国立成功大学とも協定を締結したうえで研究交流に参画していただき、近代スポーツの歴史をテーマに交流を継続してきた。今回は、国立成功大学が主催者となり、国立台湾歴史博物館と本館が共催者となって、近現代のスポーツ交流、文明、植民地を捉え返すことを目的に、アメリカやフランスからの報告者も加えて実施する。

#### 2. 開催内容

2021年5月13日（木） 台湾時間 9：00～16：50（日本時間 10：00～17：50）

9：30-9：50 開幕式

西谷大国立歴史民俗博物館館長挨拶

9：55-11：55 第一場：近代東亞運動員の跨界移動（越境する近代東アジアのアスリート）

高嶋 航（京都大学）報告 劉長春與于希涓

13：30-14：30 第二場：東亞世界的體育交流（東アジアのスポーツ交流）

荒川章二（国立歴史民俗博物館名誉教授）報告 國立歴史民俗博物館特展「馳騁東亞の身體：體育運動的近代」  
與張星賢資料

14：50-16：50 第三場：身體與社群文化（身体と地域文化）

2021年5月14日（金） 台湾時間 9：00～16：50（日本時間 10：00～17：50）

9：30-11：30 第四場：身體，性別與體育運動（身体，性とスポーツ）

13：00-15：00 第五場：體育運動與臺灣社會（スポーツと台湾社会）

15：20-16：45 第六場：體育運動與殖民地治理（スポーツと植民地統治）

金 誠（札幌大学）報告 朝鮮半島の體育運動與殖民地支配

樋浦郷子（国立歴史民俗博物館）報告 帝国日本の身体髪膚

16：50 閉幕

#### 3. 総括

日本欧州ともに植民地支配を行った近代は、オリンピックが再興された時期にもあたる。戦後脱植民地化にとともに、旧宗主国から五輪に出場せざるを得なかった植民地出身のアスリートの記録が散逸したり、消去されたりしたことで、研究が深められずにきた。日本では2020年12月に『越境するアスリート』（塙書房）が刊行されて、ようやく研究が端緒についた。同書の編者（高嶋航・金誠）を報告者に迎えることでこの観点を台湾にとどまらない広がりの中なかで把握し、深化させることができた。

### 「戦争のランドスケープと先史社会」

会 場：歴博講堂・オンライン

会 期：2021年11月20日

参 加 者：78人（うち外国人5人）

主 催：岡山大学文明動態学研究所・科研費（新学術領域研究）「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明—」・国立歴史民俗博物館



### 1. 開催趣旨

先史時代の社会変化（階層化や政治的統合）のプロセスで、対人用武器の備え、村のまわりの環濠、山上のとりでや見張所、武器副葬儀礼やその舞台としてのモニュメントなど、戦争に関するさまざまな表象の物質化が集中して行われることがある。近年それらは、実際の戦闘による集団統合の痕跡というよりもむしろ、当時の人びとの世界観構築や社会的コミュニケーションの物質的表出と理解されるようになってきた。このような物質的表出を通じて、「戦争」の行為よりもその表象そのものが人間関係や社会関係を変質させ、階層化や政治的統合を促したプロセスを、ホモ・サピエンスの身体・文化の遺伝的重層性が比較的薄く文化のメカニズムを観察しやすい環太平洋の3地域（ユーラシア東部・北アメリカ大陸・南アメリカ大陸）で比較する。また、そうすることによって、日本列島の先史時代の文化的・歴史的特質を浮き彫りにする。

### 2. 開催内容

- 9：30-9：45 開催の趣旨 松木武彦（国立歴史民俗博物館 教授）  
**【第I部（午前）「現地トップ研究者が紹介する 先史時代の戦争」】**  
 9：45-10：45 エリザベス・アーカッシュ（ピッツバーグ大学人類学科考古学担当 教授）  
 「スペイン人侵入以前のアンデス社会における戦争と暴力-様々な資料の比較を通じて」  
 10：45-11：45 スティーヴン・レブランク（ハーバード大学ピーボディ考古学・民族学博物館 前副館長）  
 「社会変化誘発要因としての戦争」  
 11：45-13：15 休憩  
**【第II部（午後）「日本考古学の研究者が語る 先史時代戦争研究の第一線」】**  
 13：15-14：00 佐々木憲一（明治大学文学部 教授）  
 「北アメリカ先史時代の戦争」  
 14：00-14：45 寺前直人（駒澤大学文学部 教授）  
 「弥生・古墳時代における攻めと守りの変質とその画期」  
 14：45-15：00 休憩  
 15：00-15：45 松木武彦（国立歴史民俗博物館 教授）  
 「古墳の儀礼と戦争」  
 15：45-16：15 三者討論「先史時代の戦争と社会」  
 16：15-16：30 閉会の辞  
 （司会進行：松木武彦・国立歴史民俗博物館）

### 3. 総括

1990年代以来歴博で取り組んできた戦争研究の発展として、日本列島の先史時代の戦争を、北アメリカ大陸・南アメリカ大陸の先史時代の戦争と比較し、その共通性と多様性を浮き彫りにした。北アメリカ大陸、南アメリカ大陸それぞれの戦争の専門家（アメリカ人）と、北アメリカおよび日本の弥生時代・古墳時代それぞれの戦争の研究者が、同じ問題意識を共有しつつ、事例の提示と分析、および相互の議論を行った。その結果として、先史時代の戦争には、とくに日本考古学におけるこれまでの認識以上に、経済的・機能的側面（資源争い・支配・征服）と不可分の形で儀礼的・観念的側面が深く織り込まれ、表示されていることが明らかになった。そしてそれは、北アメリカ大陸・南アメリカ大陸ならびに世界各地の先史文化に広くみられる戦争の本質で、その具体的なあり方を比較することによって、日本列島先史～古代の歴史的特質を明らかにする具体的な展望が得られた。

## 「スイスに伝えられた日本陶磁 ジュネーヴ市立アリアナ美術館秘蔵コレクション」

- 会 場：オンライン  
 会 期：2022年1月6日  
 参 加 者：102人（うち外国人59人）  
 主 催：チューリッヒ大学東洋美術史研究室・国立歴史民俗博物館

### 1. 開催趣旨

アリアナ美術館は、世界各国の陶磁器を所蔵するヨーロッパ有数の陶磁器専門美術館である。日本国内ではあま

り知られていないが、同館は17世紀から20世紀初頭にわたるスイス最大級の日本陶磁コレクションを有しており、その点数は780点を超える。

プロジェクトでは、2016年よりチューリッヒ大学美術史研究所東アジア美術学科との連携により、このコレクションの悉皆調査に着手、同館のデータベースの充実や、展覧会開催に向けた基礎データ作成に協力してきた。

同館では、これらの成果を受けて、2020年12月11日から2022年1月9日にかけて企画展示「Chrysanthèmes, dragons et samourais. La céramique japonaise du Musée Ariana」(「菊・龍・サムライーアリアナ美術館所蔵の日本陶磁」)を開催中であり、豪華な図録も刊行された。

本シンポジウムは、プロジェクトの活動を通じて明らかになったアリアナ美術館所蔵の日本陶磁の特徴や意義を、調査や展示に携わった研究者・学生の報告を通じて明らかにするものである。オンライン開催とすることにより、幅広い対象の視聴者に改めて本館のプロジェクトの全容を発信するとともに、当該分野への理解を促したい。

## 2. 開催内容

17:30-17:35 (日本)	日高薫 (国立歴史民俗博物館教授)
9:30-9:35 (スイス)	開会の挨拶および趣旨説明
17:35-18:00 (日本)	ハンス・ビャーネ・トムセン (チューリッヒ大学教授)
9:35-10:00 (スイス)	「アリアナ美術館の日本陶磁コレクション」
18:00-18:25 (日本)	大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問)
10:00-10:25 (スイス)	「カ」銘の有田磁器について」
18:25-18:50 (日本)	渡辺芳郎 (鹿児島大学法文学部教授)
10:25-10:50 (スイス)	「薩摩焼からSATSUMAへ」
18:50-19:15 (日本)	荒川正明 (学習院大学文学部教授)
10:50-11:15 (スイス)	「日本陶磁に見る文様意匠の変遷～近世から近代へ」
19:15-20:05 (日本)	チューリッヒ大学東アジア美術史学科およびジュネーヴ市立アリアナ美術館
11:15-12:05 (スイス)	「アリアナ美術館の陶磁器調査」
20:05-20:10 (日本)	大久保純一 (国立歴史民俗博物館副館長)
12:05-12:10 (スイス)	閉会の辞 (司会進行 澤田和人・国立歴史民俗博物館)

## 3. 総括

本シンポジウムは、人間文化研究機構が2016(平成28)年度から推進しているネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」」の成果にもとづくものとして開催した。2016年よりチューリッヒ大学美術史研究所東アジア美術学科との連携により実施したアリアナ美術館所蔵の日本陶磁コレクション調査の成果は、すでに企画展示「Chrysanthèmes, dragons et samourais. La céramique japonaise du Musée Ariana」(「菊・龍・サムライーアリアナ美術館所蔵の日本陶磁」)として開催され、多くの図版を掲載する展示図録も刊行されている。シンポジウムは、展示の内容を補い、展示を見ることのできなかった人にも広く同館のコレクションの価値を知らしめ、調査によって得られた新知見を発信することを目的とした。

第一部でおこなわれた日本側の調査者3名による報告により、アリアナ美術館のコレクションが、美術的に価値の高いものであるのみならず、日本陶磁史の各分野における専門的な研究資料として有益であることが明らかにされた。また、第二部は、チューリッヒ大学の教育事業の一環として進められたプロジェクトの調査が、専門学芸員を欠く海外の美術館における展示構築に貢献するとともに、次世代研究者の育成にもたらした実りについて、展示担当者や学生たちによって具体的に報告された。

使用言語は日本語であったが、海外からの聴講者が国内の聴講者を上回り、海外における日本陶磁器に対する関心の高さがうかがわれた。

## 「新しいシーボルト研究への誘い—シーボルト(父)関連資料の基礎的な調査・研究・活用事業で考えたこと—」

会 場：オンライン  
 会 期：2022年1月15日  
 参 加 者：79人（うち外国人31人）  
 主 催：国立歴史民俗博物館

### 1. 開催趣旨

本館は2010年以降、第2期～第3期にわたってシーボルト関係資料の総合的調査・研究を継続的に推進し、フランツ・フォン・シーボルト（父）の書簡や著作等を含むアーカイヴおよび民俗資料を主な対象とし、大量かつ多様な彼のコレクションを総合的・復元的に把握することに努めてきた。まず、ブランデンシュタイン家とボーフム・ルール大学が所蔵する大量の文献資料をデジタル目録上で接合することによって、分断されていた資料群の相互利用に道を開き、また、ミュンヘン五大陸博物館所蔵のシーボルト収集民俗資料のデータベースを作成し、すでに公開されてきたライデン国立民俗学博物館収蔵資料をも含めて、文献資料と「もの」資料を接合することを可能とした。さらに、彼が自身のコレクションを用いて段階的に構築した日本の歴史と文化を表現する展示に注目し、この「日本博物館」を復元することを通じて彼のコレクションの歴史的意義について考える企画展示などを開催した。本シンポジウムは、これらの活動について整理・総括し、本プロジェクトがシーボルト研究において導き出した新しい可能性や、今後の課題は何かなどについて議論する機会とする。

オンライン開催とすることにより、幅広い対象の視聴者に改めて本館のプロジェクトの全容を発信するとともに、当該分野への理解を促したい。

### 2. 開催内容

- |                  |  |
|------------------|--|
| 18：00-18：05（日本）  | 久留島浩（国立歴史民俗博物館前館長・特任教授）  |
| 10：00-10：05（ドイツ） | 開会の挨拶および趣旨説明   |
| 18：05-18：20（日本）  | 日高薫（国立歴史民俗博物館教授）   |
| 10：05-10：20（ドイツ） | 「シーボルト関係資料の調査・研究・活用事業の成果と課題」   |
| 18：20-18：45（日本）  | 宮坂正英（長崎純心大学客員教授）   |
| 10：20-10：45（ドイツ） | 「ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係文書調査研究の経緯と課題」                                   |
| 18：45-19：10（日本）  | ブルーノ・リヒツフェルト（ミュンヘン五大陸博物館副館長）   |
| 10：45-11：10（ドイツ） | 「国立歴史民俗博物館シーボルト・プロジェクトがミュンヘン五大陸博物館および<br>展覧会『日本を集める』にもたらしたもの」        |
| 19：10-19：15（日本）  | 休憩   |
| 11：10-11：15（ドイツ） |  |
| 19：15-19：40（日本）  | 湯川史郎（ボン大学専任講師）   |
| 11：15-11：40（ドイツ） | 「越境の実践者としてのトラウトとシーボルト—総合的な視点を再獲得するための<br>方法としての『Biographie』の可能性について」 |
| 19：40-20：05（日本）  | 小林淳一（東京都江戸東京博物館副館長）  |
| 11：40-12：05（ドイツ） | 「異文化理解としての在外日本コレクション—パンデミックの後に」                                      |
| 20：05-20：10（日本）  | 休憩   |
| 12：05-12：10（ドイツ） |  |

20：10-20：30（日本） 香澤宣賢（東海大学名誉教授）、ヤン・シュミット（ルーベン大学准教授）  
12：10-12：30（ドイツ） コメント

20：30-20：55（日本） 久留島浩（国立歴史民俗博物館前館長・特任教授）  
12：30-12：55（ドイツ） 質疑および討論

20：55-21：00（日本） 大久保純一（国立歴史民俗博物館副館長）  
12：55-13：00（ドイツ） 閉会の辞  
（司会進行 久留島浩・国立歴史民俗博物館）

### 3. 総括

本シンポジウムは、本館が中心となって、2010年以降、第2期～第3期にわたって継続的に推進してきたフランツ・フォン・シーボルト（父）関係資料の総合的な調査・研究・活用事業を総括するものとして開催された。

前半は、人間文化研究機構のプロジェクトの中心的課題であったミュンヘン五大陸博物館所蔵のシーボルト・コレクション（もの資料）および、ブランデンシュタイン家文書の調査関係者によって、調査成果や展示による発信に関する紹介がおこなわれ、シーボルト研究がプロジェクト発足以前の状況からどのように進展したか、またプロジェクトが現地に対して果たした貢献などが明らかにされた。

後半では、シーボルトを世界史の中でとらえるうえで重要なトラウツやモースに関する報告がおこなわれ、これまでの本館のプロジェクトをうけて今後展開されるべきシーボルト研究、19世紀資料研究、博物学・博物館史研究、またポストコロナの国際連携などについての提言もあった。

さらに、日欧2名のコメントにより、シーボルト研究の専門的な観点による評価と、近現代世界史の視点からの評価がなされ、プロジェクト成果の整理・総括という意味できわめて有意義な内容であった。

今回は、シーボルトというテーマに合わせて、使用言語を日本語とドイツ語としたことにより、より深い内容を議論し合うことができた。今後は、幅広い視聴者に発信していくという意味で、英語による開催、もしくは3カ国語による開催も検討したい。

## 「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション—さらなる洞察」

会 場：オンライン

会 期：2022年3月14日

参 加 者：56人（うち外国人15人）

主 催：ウィーン世界博物館・国立歴史民俗博物館

### 1. 開催趣旨

ウィーン世界博物館が所蔵する約5000点におよぶハインリッヒ・フォン・シーボルト収集日本資料は、1889年、同館の前身であるオーストリア帝立＝王立自然史博物館に自身の手によって寄贈されたものである。本館は、2016年度よりこのコレクションの総合調査に着手するとともに、各地にのこるシーボルト関連資料の情報収集や調査を進めてきた。調査研究は現在も進行中であるが、その成果の一部は、すでに2020年にウィーン世界博物館において開催された「Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold（明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から）」や、論文集『異文化を伝えた人々Ⅱ ハインリッヒ・フォン・シーボルトの蒐集資料』（臨川書店刊）において広く公開している。

本シンポジウムは、これらの展示や論文集に関連する最新の研究成果を広く共有し、ウィーン所在のハインリッヒのコレクションと、その他ヨーロッパ各地に散在するシーボルト・コレクションについて議論を深めることを目的とする。

当初2020年3月9日～10日にかけてウィーン世界博物館において開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大を受け延期となっていたシンポジウムの内容の一部を切り取り、オンライン開催とすることにより、幅広い対象の視聴者に本館のプロジェクトの成果を発信するとともに、当該分野への理解を促したい。

### 2. 開催内容

日本17：30-17：40 開会の挨拶

- オーストリア 9:30-9:40 ジョナサン・ファイン (ウィーン世界博物館)
- 日本 17:40-18:10 「フランツ・ヘーガーの日記から—1885年エルバツハ」  
オーストリア 9:40-10:10 ベッティナー・ツォルン (ウィーン世界博物館)
- 日本 18:10-18:40 「交差する記録—ハインリッヒの北海道調査を中心に」  
オーストリア 10:10-10:40 山崎幸治 (北海道大学 アイス・先住民研究センター)

(休憩) 5分

- 日本 18:45-19:15 「明治の調べ—ハインリッヒ収集の楽器」  
オーストリア 10:45-11:15 日高薫 (国立歴史民俗博物館)
- 日本 19:15-19:45 「ハインリッヒ・フォン・シーボルトの「日本・中国展覧会」—ヴェルツブルク, 1896/97年」  
オーストリア 11:15-11:45 シビル・ギルモンド (ヴェルツブルク大学/京都大学)

(休憩) 5分

- 日本 19:50-20:15 コメント 堅田智子 (流通科学大学)  
オーストリア 11:50-12:15 コメント ステファン・ケック (オーストリア科学アカデミー・アジア文化・思想史研究所)
- 日本 20:15-20:55 質疑応答・討論  
オーストリア 12:15-12:55 パネリスト全員
- 日本 20:55-21:00 閉会の辞  
オーストリア 12:55-13:00 大久保純一 (国立歴史民俗博物館副館長)  
(司会進行: 福岡万里子・国立歴史民俗博物館)

### 3. 総括

本シンポジウムは、人間文化研究機構が2016(平成28)年度から推進しているネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」の成果にもとづいて開催した。2016年度から2019年度にかけておこなった7回にわたるウィーン世界博物館所蔵ハインリッヒ・フォン・シーボルト収集資料の調査成果は、すでに中間報告として、世界博物館における企画展示「Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold (明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から)」として開催し、論文集『異文化を伝えた人々II—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの蒐集資料』(臨川書店刊)も刊行されている。シンポジウムでは、調査や展示等にたずさわった国内外4名の研究者によるその後の新たな研究成果が報告され、従来はあまり注目されてこなかったハインリッヒ・コレクションへの理解が深まった。

また、日欧各1名のコメンテーターから、ハインリッヒのみならず、父のフィリップ・フランツ、兄のアレクサンダーを含めたシーボルト父子の再評価や、今後の研究の展望を示唆する広い視野によるコメントが寄せられた。

ウィーン世界博物館におけるコレクション調査は未了であるが、後継プロジェクトにおける継続が予定されており、コレクションの全体像の把握と、更なる研究の進展が望まれる。

## 【国際研究集会】

### 「中世文書の様式と東アジアにおける国際比較」

会 場：オンライン

会 期：2021年11月20日  
 参 加 者：15人（うち外国人3人）  
 主 催：国立歴史民俗博物館

### 1. 開催趣旨

共同研究「中世文書の様式と機能および国際比較と活用に関する研究」（2016～18年）では、国際シンポジウムと歴博フォーラムに基づく図書を終了後に刊行しており、また研究報告特集号も2021年3月に刊行した。これらの図書について、執筆者であるメンバーを再度招集し、合評会の形で討議を行うことで、成果と課題を確認したい。

### 2. 開催内容

共同研究「中世文書の様式と機能および国際比較と活用に関する研究」のメンバーが集まり、その成果と課題について、刊行した下記2冊の報告書（※）の内容、およびその後の各自の研究課題を中心に討議し、これまでの研究を総括すると共に、今後の展望を得た。

※『古文書の様式と国際比較』（勉誠出版、2020年2月）

『国立歴史民俗博物館研究報告』第224集（2021年3月）

発表者（報告書の執筆者）は、事前に下記①～③についての発表・質問用紙を提出し、それに基づいて発表を行ない、執筆者毎に質問と討議を行なった。

- ①現在行なっている仕事と研究課題
- ②執筆した論文についての成果と課題
- ③他の執筆者の論文についての質問や批評

### 3. 総 括

東アジアにおける比較古文書学は、必要性が認識されつつあるが、具体化はまだ乏しく、本共同研究と企画展示（「日本の中世文書」2018年）、および刊行した2冊の報告書が先鞭を付けた形になっている。その成果を執筆者相互が確認すると共に、各自のその後の研究状況も合わせて、現状を総括し、課題への認識を深めることができた。

## 「国境を越える『延喜式』」

会 場：オンライン  
 会 期：2022年12月18日・19日  
 参 加 者：56人（うち外国人19人）  
 主 催：国立歴史民俗博物館

### 1. 開催趣旨

日本史だけでなく学際の研究にも使われてきた『延喜式』は、国境を越え幅広いニーズに応えうる可能性を持っている。この国際研究会では、その『延喜式』の魅力をどう引き出せるかについて英語圏の教育研究者・大学院生と共に検討する。報告トピックには、以下のような例が挙げられる。

- 教育の場での活用：日本や北アメリカの大学における歴史授業（学部講義、院ゼミ）
- 『延喜式』のポテンシャルを探る—グローバル・レベルでの研究成果共有を通して
- 翻訳の際に直面した問題やそれに対する解決案

これらの報告を通して、『延喜式』英訳の重要性やその際に遭遇した問題を共有するとともに、その解決法について議論し、新たな研究課題や活用法に向けて意見交換をおこなう。討論を通じ、国境を越える学術的ネットワークの拡大も目指す。

### 2. 開催内容

第1日目

2021年12月18日(土) 日本（2021年12月17日（金） アメリカ合衆国）

JST：日本時間／PST：西海岸時間／EST：東海岸時間

JST：9：00-9：10 開会のあいさつ・趣旨説明・報告者紹介等

PST : 16 : 00-16 : 10 EST : 19 : 00-19 : 10	小倉慈司 (国立歴史民俗博物館教授)
JST : 9 : 10-9 : 40 PST : 16 : 10-16 : 40 EST : 19 : 10-19 : 40	報告 1 外国史としての日本史—アメリカ合衆国における学位取得と教育 河合佐知子 (国立歴史民俗博物館特任助教・人文知コミュニケーション)
JST : 9 : 40-10 : 20 PST : 16 : 40-17 : 20 EST : 19 : 40-20 : 20	報告 2 アメリカの大学でどう日本法律史を教えるか—律令及び『延喜式』を中心に ジョン・ビジョー (南カリフォルニア大学教授)
JST : 10 : 20-10 : 30 PST : 17 : 20-17 : 30 EST : 20 : 20-20 : 30	休憩
JST : 10 : 30-11 : 20 PST : 17 : 30-18 : 20 EST : 20 : 30-21 : 20	質疑応答 (報告 1・2) 司会: エミリー・ウォーレン (南カリフォルニア大学大学院歴史学科PhDキャンディ デイト)
JST : 11 : 20-11 : 45 PST : 18 : 20-18 : 45 EST : 21 : 20-21 : 45	報告 3 『延喜式』英訳から「告文」について考える 山口えり (広島市立大学国際学研究科・国際学部准教授)
JST : 11 : 45-12 : 05 PST : 18 : 45-19 : 05 EST : 21 : 45-22 : 05	質疑応答 (報告 3) 司会: 河合佐知子 (国立歴史民俗博物館特任助教・人文知コミュニケーション)
JST : 12 : 05-12 : 20 PST : 19 : 05-19 : 20 EST : 22 : 05-22 : 20	まとめ
第 2 日目	
2021年12月19日(土) 日本 (2021年12月18日 (金) アメリカ合衆国)	
JST : 9 : 00-9 : 10 PST : 16 : 00-16 : 10 EST : 19 : 00-19 : 10	日程確認・報告者紹介等 河合佐知子 (国立歴史民俗博物館特任助教・人文知コミュニケーション)
JST : 9 : 10-9 : 35 PST : 16 : 10-16 : 35 EST : 19 : 10-19 : 35	報告 4 世界食文化史研究における『延喜式』の意義 エミリー・ウォーレン (南カリフォルニア大学大学院歴史学科PhDキャンディデイト)
JST : 9 : 35-9 : 55 PST : 16 : 35-16 : 55 EST : 19 : 35-19 : 55	質疑応答 (報告 4) 司会: 山口えり (広島市立大学国際学研究科・国際学部准教授)
JST : 9 : 55-10 : 20 PST : 16 : 55-17 : 20 EST : 19 : 55-20 : 20	報告 5 『延喜式』にみえる朝堂政務の形跡—考選文申送手続きを事例として 古田一史 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)
JST : 10 : 20-10 : 40	質疑応答 (報告 5)

- PST : 17 : 20-17 : 40 司会 : 山口えり (広島市立大学国際学研究科・国際学部准教授)  
EST : 20 : 20-20 : 40
- JST : 10 : 40-10 : 50 休憩  
PST : 17 : 40-17 : 50  
EST : 20 : 40-20 : 50
- JST : 10 : 50-11 : 15 報告 6  
PST : 17 : 50-18 : 15 海外における教材としての『延喜式』—巻37「典薬寮」を中心に  
EST : 20 : 50-21 : 15 アレッサンドロ・ポレット (京都大学大学院文学研究科・日本学術振興会外国人特別  
研究員)
- JST : 11 : 15-11 : 35 質疑応答 (報告 6)  
PST : 18 : 15-18 : 35 司会 : 河合佐知子 (国立歴史民俗博物館特任助教・人文知コミュニケーション)  
EST : 21 : 15-21 : 35
- JST : 11 : 35-12 : 00 報告 7  
PST : 18 : 35-19 : 00 『延喜式』からみた古代中世移行期の日本における天皇の変質  
EST : 21 : 35-22 : 00 井上正望 (国立歴史民俗博物館科研究費支援研究員)
- JST : 12 : 00-12 : 20 質疑応答 (報告 7)  
PST : 19 : 00-19 : 20 司会 : アレッサンドロ・ポレット (京都大学大学院文学研究科・日本学術振興会外国  
人特別研究員)  
EST : 22 : 00-22 : 20
- JST : 12 : 20-12 : 50 最終討論  
PST : 19 : 20-19 : 50  
EST : 22 : 20-22 : 50
- JST : 12 : 50-13 : 00 閉会のあいさつ  
PST : 19 : 50-20 : 00 ブルース・バートン (アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター所長)  
EST : 22 : 50-23 : 00  
(総合司会 : 河合佐知子 (国立歴史民俗博物館特任助教・人文知コミュニケーション))

### 3. 総括

国境を越えて『延喜式』の可能性を探るという目的のもと、日本およびアメリカ・ヨーロッパを含む海外から異なる国籍の報告者や参加者を迎え、『延喜式』の英訳事業及び教育・研究活動等の様々な切り口からグローバルレベルの活用を模索した。報告者は、ベテランの教授に加え、ポストクや博士課程後期の院生等若手研究者を含んだ多様なメンバーで構成され、それぞれの立ち位置から経験やアイデアを共有した。そして、『延喜式』英訳の意義、『延喜式』を使った研究による新たな視点、日米の大学授業例をはじめとする教材としてのポテンシャル等について多彩な報告を行い、活発な意見交換をするとともに、国際レベルでの学術交流・ネットワーク作りをおこなった。報告中は日本語・英語のスライドや配布資料を提供し、また質疑応答においては逐次通訳を行うなど、バイリンガル体制で臨んだ。これらの試みを通して、英語圏・日本語圏どちらの参加者にとってもインクルーシブで実ある研究集会を目指すことができた。

### [外国人研究員]

氏名	所属	研究課題	期間
キム デフアン (金 大煥)	韓国国立中央博物館	ネットワーク理論から見た加耶と日本列島の交渉	2021.4.1~ 2021.6.15



## [協定締結機関との交流]

招 聘			
氏 名	所 属	用 務	期 間
キム デファン (金 大煥)	韓国国立中央博物館	外国人研究員としての研究 (研究課題「ネットワーク理論から見た加耶と日本列島の交渉」)	2021.4.1～ 2021.6.15